







丸戸 史明

Engage Kiss (Volume Four)
Special novel by Fumitaki Maruto

16 years ago

EK4

「……許さないよ、マイルズ」

「許さなけりやどうする？ まあ、殺すんだろうけどよ」

「殺す殺さないの前に、やることがあるだろ、あんた……」

「やることって……？」

「謝れよ！」

「……はあ？」

「三上さんに！ 今まで陥れた人たちに！ 殺した人たちに！ 騙していた人たちにっ！ 社長に！ アヤノさんに！」

「俺の親父にっ！ そして俺にっ！」



「あのねっ、あのねっ……アヤノ、しゅーをおよめさんにするの！」
「そ、そうか……」

秋晴れの、週末の昼下がり。

緒方家がベイロンシティに越してきてから毎月恒例となった、モーガン家、夕桐家、緒方家合同のバーベキューパーティの会場に、無邪気で不穏当な発言が響き渡った。

「なのね、なのねっ！ しゅーったら、同じよーちえんの子にちゅーされてたんだよ！ アヤノだってまだしてないのにつ！」

「そ、そ、そうか……」

自宅の庭に設置したバーベキューグリルで肉を焼きながら、その家の当主、マイルズ・モーガンは、小さな招待客の、その突然の告白に目を白黒させつつ、それでも肉を焦がさぬよう網への目配りは忘れない。「それでねっ、それでねっ！ アヤノ、その子とぼっこはっこになぐりあったの。そしたらお母さんと担任の先生がすごい顔して怒ってきてね！」

「いや、そりゃ小学生のアヤノが幼稚園の女の子とやり合ったらな……」

「だからマイルズもお母さんに言つてよ……アヤノまちがったことしてないって。そもそもけんかりよーせーばいだし。しゅーがうけたせくはらにこーぎしただけだし！」

「まあ待て、待ってくれアヤノ」

その、頬と額の絆創膏も痛々しい小学校低学年女子の主張にはマイルズも色々と思うところがあった。

どっちがどっちをお嫁さんにするのかとか、キスという行為そのものが問題なのか先を越されたのが問題なのかとか、殴ることとセクハラのどちらが悪いのではないのかとか……あと様々な問題点がとても近年のコンブラに対してセンチティブなものばかりなのは何故なのかとか。

「と、とにかくだなあ、アヤノはお姉ちゃんなんだし、ここは大人しく謝つていた方が」

「アヤノしらない女のお姉ちゃんなんかじゃない！ しゅーのお姉ちゃんでもない！ だってお姉ちゃんだったらしゅーをおよめさんにできないもん！」

16
years
ago



Engage Kiss (Volume Four)
Special novel
by Fumiaki Maruto

丸戸史明

※ ※ ※

「おいアキノ、お前、娘の世話こつちに押しつけといて自分だけのうのと肉食ってんじゃねえよ！」

「パーティの主催者がそんな狭量なことではないのかしら？　そういう態度じゃ次から誰も来なくなるわよ？」

その後、なんとか近所の女の子の、愚痴なのか惚気なのか武勇伝なのかわからない会話から逃げ出したマイルズは、そのすぐ側の椅子にのんびり座りつつ肉とビールを堪能している彼女の母親に、恨みがましい視線を向けた。

「それに今、あの子とは戦争中なの。だから私のところには絶対近寄ってこないわよ」

「アヤノから聞いたが……そもそも親子喧嘩したままウチに来るんじゃねえよ」

「そんなこと言わないでマイルズ。あんたからアヤノにそれとなく言ってくれない？　向こうの子に謝って」

「こん中じゃ俺が一番無関係だろうが。せめてイサムやサユリに頼めよ……」

と、マイルズは、少し離れたテーブルで、こちらを我関せずと食事を楽しんでいる緒方夫妻を指差す。

「無理よそんなの。アヤノったら緒方一家にはものすごく外面いいんだもの。にっこにこ誤魔化されてそれではい終了よ」

そして夫妻の側には、今のアキノの言葉を証明するかのように、シユウにべったりのアヤノが、愛しの幼なじみの口にぎゅうぎゅうと肉を詰め込み、なんとも朗らかな空気を醸し出していた。

「そもそもアキノ、お前あんまりアヤノとの時間取れてないだろ。だから反抗的になんじゃねえのか？」

「そんなこと言ったって、来月には警視の昇任試験があるんだもの。一緒に過ごす時間どころか、家に帰る時間すらも……」

「そんなんじゃ、アヤノが反抗したってしょうがねえだろ。そもそもお前さん譲りの腕つぶしなんだし、幼稚園の子なんかと喧嘩したら、タダで済むはずが……」

「ところがいい勝負だったらしいのよ……最近のアヤノって、高学年の男子でさえ敵わないのに、一体どんな強敵と巡り会ったのやら興味あるわね」

「……お前がそんな考え方でいる限りアヤノが相手に謝ることなんてねえよ」

「そもそもだなあアキノ、シングルマザーのお前が仕事にかまけてたら、誰がアヤノの面倒見るんだよ？　せめて再婚とか……」

「嫌よ、男はもうこりこり。私にはアヤノさえいてくれればいい」

「だったらちゃんと面倒見ろよ……」

ちなみに、彼女の入庁時の職場の先輩にして今は直属の部下のマイルズにしても、アヤノの父親の正体はまったくの謎だった。

いつ結婚していつ離婚したのか、いやそもそも入籍していたのかすら定かでないほど、アキノは自らのプライベートをひた隠しにしていた。

……愛しの愛娘が生まれるまでは。

「でも、まずは警視にならないと……退魔局のトップに立つためにはね」

「よくもまあ、あんな危険なポストに就きたがるな。悪魔退治の隊長様なんて、命がいくつあっても足りやしねえ」

「危険だからこそよ……何としても、この街から悪魔を駆逐して、シティ警察を安全な職場にしてくちやならないの。それが出来そうな人材が他にいる？」

「そりゃ、芦屋警部とか……」

「芦屋君なんて無理。あんな事なかれ主義のお役人さんに何ができるの？」

「あの警部殿、お前よりよっぽど年上なんだがなあ……」

と、マイルズは、自分よりよっぽど若い上司を苦笑とともに見つめる。

「それよりも、まだマイルズの方が見込みあるわよ。本当に昇任試験受ける気ないの？　あなたなら警部補なんてすぐだし、三年あれば警部だって……」

「前にも言っただろアキノ？　俺は出世になんか興味ねえんだって」

そして今度は、自分よりよっぽど若い母親を、憐憫の表情で見つめる。

「家族が元気なら、他に何もいらねえだろ……」

※ ※ ※

「なあ、シユウよ……お前、アヤノのことどう思ってたんだ？」

「え？ え？ マイルズおじさん、なんでそんなこと……？」

「まあ、俺もなんでも思わない事もないが……女の恨みは買わないに越したことはねえってことだ」

結局、夕桐家の母娘の揉め事に強制的に巻き込まれたマイルズは、その元凶……いや、全ての始まりとなったモテモテ幼稚園児のもとに足を運び、今は同じテーブルで男同士、腹を割って話をしていた。

……まあ、彼を連れ出す時、自分の男を取られたと勘違いしたアヤノにもものすごく恨みがましい顔で睨まれた時には、『自分は一体誰のために頑張っているのだろうか……』などと、結構な無常感に苛まれはしたけれど。

「だからな？ シユウ、お前も女の子に余計な恨みを買う前に、相手にハッキリと気持ちを伝えた方がな……」

「アヤノちゃんは大好きだよ……アヤノちゃんにも、いつもそう言ってる」

「お、そうか？」

と、シユウは、男同士の気安さからか、それとも話の分かる大人相手だからなのか、マイルズの問いかけに、素直な想いを口にした。

「強いし、かっこいいし、綺麗だし……それにいつも僕を守ってくれる」

シユウの言葉は、彼の内気な性格もあいまって、声は小さいし、少しかすれ気味だし、語尾なんか消え入りそうなくらいではあったけれど。

「あと、とってもいい匂いがするし、髪の毛なんかツヤツヤだし……お肌はちょっと日焼けしてるけど、でもあったかくて……ふれあっていると安心する」

「お、お、おう……」

それでも表現力も言葉遣いも、年上のアヤノよりよっぽど洗練されていて、しかもその口説き文句が超絶自

然に出てきているように感じられてしまうせいで、同性のマイルズですら『あーコイツはモテるわー』と実感せずにはいらなかった。

「でも、キサラちゃんも好きなんだ……」

「キサラちゃん？ その子がアヤノと喧嘩した同じ幼稚園の？」

「アヤノちゃんみたいにさっぱりした感じのコじゃないけれど……とっても女の子らしくて、優しく、可愛くて……あと、ほっぺも柔らかくてぶにぶにするし、お肌はまっ白ですべてで、ミルクの香りがして、くっついてると嬉しくなってる……」

「……よくわかったそれくらいにしとけ。あとそっちはアヤノには言うなよ？」

そしてその口説き文句が複数の女性相手にナチュラルに湧いて出てくるせいで、『あーコイツの周りは修羅場になるわー』と実感せずにはいらなかった。

「だから、アヤノちゃんとキサラちゃんには、本当は仲良くしてもらいたかったんだけどなあ……」

……なお、シユウがここで口にした幼稚園女子の名前については、この段階では特に意味のない事実であつたし、この時点で既にその名を持っていた彼女は悪魔ならぬ普通の人間であるということをごに明記しておく。「そうか、お前もそう思ってるんだな？ なら話が早い。アヤノに、その子に謝るよう、お前からも頼んでくれねえかな？」

「それは……無理だよ」

「そんなことあねえだろ。アヤノだってお前の頼みなら……」

「だって今日、キサラちゃんの引越しの日なんだもん……今ごろもう、お空の上だよ」

「な……」

その後、シユウはマイルズに、その幼い彼女のことをぼつぼつ語った……

彼女の父はある国の外交官で、ちょうど先月末にこのベイロンシティでの駐在期間を満了し、本国への帰還が決まっていた。

そんな、ほぼ間違いない今生の別れを悲しんだ彼女の方から、『シユウくんとの思い出が欲しい』などと、とても幼稚園児とは思えない告白を受けたシユウは、流されるように初めてのキスを捧げ……

あろうことかその現場を、もつとも見られてはならない人物に見つかってしまったせいで、小さな恋のメロディ的な切ない別れのシーンが、極道の妻たちの血で血を洗うド級修羅場へと変貌してしまっただけだった。

「なんてこった……」

シユウが語ったその事実は、シユウ自身と相手の女の子にとってはもちろん、多分アヤノにとっても、苦みの強いものとなるのは想像に難くなかった。

この事実を告げれば、もう二度と謝ることも、仲直りすることも、自分の罪悪感を払拭することもできないと知ったアヤノは、深い悲しみと後悔の念に、永い間囚われるのではないか？

そう、この後のアヤノの泣き顔を思い、シユウと同じ哀しげな表情を浮かべたマイルズは……

※ ※ ※

「え？ あの女ひっこしちゃったの!? やったあああ！ これで五にんめの敵もげきついだあああ！」

「ええ……」

その心配がまったくの杞憂に終わってしまったことに、ほんの少しの安堵と……

そして、アヤノの将来に関するたっぶりの不安を覚えたのだった。

※ ※ ※

「ね？ わかったでしょう？ 本当に子育てって難しいものなのよマイルズ！」

「いや現在進行形で子育てに失敗してるアキノに言われてもなあ……」

「まあ、とは言っても、子持ちじゃないのはマイルズだけだしなあ……お前には今の俺たちの苦勞はわからんよ」
「言ってやって言ってやってイサム！」

子供たちの説得工作に失敗し、苦い敗北感に浸っていたマイルズのもとに、その子供たちとの対話から早々に離脱した親たちが寄ってきて、彼の戦果を根掘り葉掘り聞き出しては、まるで他人事のように批評する。

そのあまりに理不尽な状況に晒され、マイルズの喉を通るビールの苦みはさらに増していった。

「お前らそんな呑気にしてるけどなあ、これからアヤノとシユウが大きくなったらどうすんだ？ 今の感じじゃ、シユウが次々とガールフレンドを大量生産して、それをアヤノが全てぶちのめす未来しか見えんぞ？」

「まあ、我が息子がそんなにモテモテになってくれたら、俺としちゃ『よくやった！』って褒めてやるけどなあ……そうはならんだろ。モテるのは幼稚園までさ」

「そうよ、なるわけじゃないじゃない。今はアヤノも自分の世界が狭いから、側にいるシユウ君に執着してるだけよ。中学生にでもなったらすぐに別の男の子に移りするって」

……という、互いの親の楽観的な未来予想図に、マイルズだけが「本当にそうかあ？」と眉をひそめていたが、結局誰の予測が正しかったのかは、この特典小説の読者諸兄には既に明かされている通りなのでフツツと含み笑いでもして読み進めていただきたく。

「それに、親としちゃそんな未来のことを心配してる余裕なんてないんだ。お前らには普通に接してるみたいだけど、シユウも難しい年頃でなあ……」

「……イサム？」

「シユウ君、どうかしたの？」

「……サユリに懐かない？ シユウが？」

「今まではどちらかというと、マザコンかってくらいにべったりだった気がするけど」

「まあ確かに、ちよっと前まではそうだったんだがなあ……」

パーベキューも終盤に入り、随分と酒が回ったせいから、イサムの口が滑らかに、緒方家の個人事情を詳らかに